

28P-am05

広島市内薬局を対象とした遺伝子検査に関する意識調査 —薬剤師の年齢及び地域による解析—

○池田 佳代¹, 細井 徹¹, 吉井 美智子¹, 杉山 政則², 小澤 光一郎¹ (¹広島大院医歯薬保治療薬効学, ²広島大院医歯薬保 未病・予防医学共同研究講座)

【目的】肥満・アルコール関連遺伝子検査は、DTC (direct to consumers) 遺伝学的検査の一つである。本検査は、生活習慣病予防への寄与が期待される一方で、被験者への誤った情報による過度な不安や、誤った認識を生む危険性が指摘されている。我々は、薬剤師が本危険性を未然に防ぐと共に生活習慣病予防に貢献する地域住民の健康のサポートに繋がる仕組みの構築を目指しており、今回広島市内薬局を対象とした遺伝子検査への意識調査を行った。本報告では、薬剤師の年齢や地域による意識の相違等について検討した結果を合わせて報告する。

【方法】広島県薬剤師会の協力により、アンケート用紙を広島市内の薬局に送付し、回答・返送を依頼した (2016年9月下旬～11月下旬)。アンケートでは5段階選択の回答及び意見等の記載を依頼した。なお、本研究は広島大学ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会の許可 (第ヒ-137-3号) を得て実施した。

【結果・考察】アンケートの回答は280薬局 (薬局回収率43%) から得られ、回答者の総数は700名だった。「遺伝子検査への関心」がある薬剤師が68%であった一方、「遺伝子検査に関わりたい」薬剤師は26%のみであった。本遺伝子検査は一つの塩基が他の塩基に置き換わる一塩基多型 (single nucleotide polymorphism (SNP)) の検査である。「SNP」を20歳代の薬剤師の90.9%が「知っている」と回答したが、40～60歳代では薬剤師の11.7～15.8%が「知っている」と回答した。これは、近年の遺伝子情報の医療への貢献・重要性の増加に向けた大学の教育カリキュラムの効果と考えられる。しかし、「遺伝子検査に関わりたい」と回答した割合は、薬剤師の年代による大きな違いは認められなかったため、さらなる遺伝子検査セミナーによる遺伝子検査への啓発が必要と考えている。